女性ファッションの流行

システム科学技術学部　経営システム工学科
2年　船木　涼音
2年　今野　七海
2年　佐々木　彩
2年　高橋　美衣
2年　松岡　茉生
指導教員　システム科学技術学部　経営システム工学科
教授　木村　寛
助教　荒谷　洋輔
特別助教　斎藤　裕

１．はじめに

現代はSNSなどの発展により情報収集が簡単にできるようになったため、女性ファッションは多様化した。それにより、街ごとの個性が薄れたことで様々な系統のファッションが全国でみられるようになった。

これまで流行についての先行研究では、芳賀はま子［1］は流行の展開過程について調査をし、流行を取り入れる時期に個人で差があると述べている。さらに、ロジャース説を用いて、流行を生み出す革新者から最も流行を取り入れるのが遅い遅滞者まで5つに分類されるとしている。

本研究では、ロジャース説をファッションの視点から考えた。そこで、割合の高い前期追随者、後期追随者について着目し、女性を前期追随者と後期追随者に当たるとした。よって、前期追随者としてアパレル店員、後期追随者としてアパレル店員を除く一般女性を対象に現在の女性ファッションの流行を調査する。そして、一般女性の流行が前期追随者からの影響を受けているのかをみようとするものである。

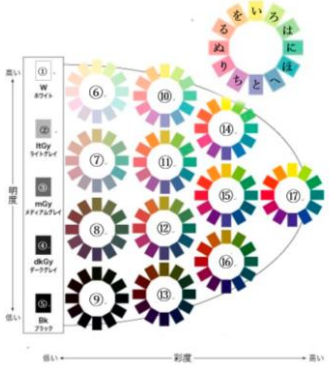
２．方法

12月下旬から2月上旬にかけてアパレル店員と主に10～20代の一般女性を対象にアンケート調査を行った。設問内容は、年齢、雑誌の購読の有無、対象者の服の購入について(頻度、金額、量)、昨年度の秋冬に着用した服(色、柄、形)、今年度の秋冬に流行していると思う服(色、柄、形)、流行に敏感かなどである。

なお、アンケート調査において対象者の認知している流行の色、柄、形を判定するために次の資料を使用した。

色については、PCCS（日本色彩研究所による日本色研配色体系）[3]の色相から無彩色5色、有彩色144色の計149色を使用した。(図１)柄、形についてはモダリーナ「イラストファッション・アパレル用語辞典」[4]から柄20個、形32個を使用した。

図1．色相



色を詳しく知りたかったため、このような回答方法を作成した。また、系統をイメージしやすくするため、イラストをオリジナルで作成して、回答してもらうことにした。(図2)

図2. 系統イラスト

３．統計的検定結果

本研究では、アパレル店員を前期追随者、一般女性を後期追随者と仮定したが、実際に仮定が成り立っているかを流行に敏感かという質問で判断した。アパレル店員は75%の人が流行に敏感であると回答したが、一般女性の流行に敏感であるという回答は30%にとどまっている。このことから、アパレル店員を前期追随者と仮定しても支障はないと考えられるだろう。

１）色

表1.　昨年度の秋に着用した服の色

色	観測値	理論値	色	観測値	理論値
1	10	6.51	へ	11	2.17
2~4	10	4.34	と	2	4.34
5	12	19.53	ち	2	2.17
い	11	8.68	り	2	6.51
ろ	2	8.68	ぬ	9	17.36
は	1	2.17	る	10	8.68
に	2	4.34	を	16	4.34
ほ	2	2.17	**計**	**102**	

表1は、昨年度の秋に着用した服の色について検定した結果である。無彩色と有彩色のトーンを5個に分類した計65個に分けて回答を集計し、適合度検定を用いてアパレル店員と一般女性の回答が一致しているかを検定した。ここで、帰無仮説を「アパレル店員と一般女性で回答が一致している」、対立仮説を「アパレル店員と一般女性で回答が一致していない」とした。その結果、棄却限界値が23.7、昨年度秋のt値が59.11であったため、帰無仮説は棄却され、一致していないと言える。

そこで、アパレル店員，一般女性という区別を問わず、女性ファッションに取り入れる色は1年で変化があるのかどうかに疑問をもち、円グラフを作成したところ、昨年と今年で秋冬ともにグラフが類似していたため、帰無仮説を「秋冬の昨年度と今年度の回答が一致している」、対立仮説を「秋冬の昨年度と今年度の回答が一致していない」として、以下の検定を行った。

表2.　冬に着用した服の色

色	観測値	理論値	色	観測値	理論値
1	25	21.55	へ	6	5.39
2~4	8	15.27	と	18	13.47
5	15	23.35	ち	11	1.80
い	7	7.18	り	8	5.39
ろ	1	0.90	ぬ	12	7.18
は	1	1.80	る	3	6.29
に	3	3.59	を	12	13.47
ほ	2	5.39	**計**	**132**	

表2は、無彩色を3個、有彩色を12個に分類した計15個に分け、適合度検定を用いて昨年秋と今年秋，昨年冬と今年冬の回答が一致しているかを検定したものである。表1と同様に検定した結果、棄却限界値は23.7、冬のt値は64.73であったた

め、帰無仮説は棄却され、一致していない。円グラフが類似していたのにもかかわらず、関連がなかった原因を探るため、表の数値を見比べてみた。すると、秋と冬それぞれで「ち(紫)」の観測値と理論値の数値に大きな差がみられた。そのため、この色を表から削除して検定をすることにした。その結果が以下の表である。

表3. 冬に着用した服の色（紫なし）

色	観測値	理論値	色	観測値	理論値
1	25	20.03	ほ	2	5.01
2~4	8	14.19	へ	6	5.01
5	15	21.70	と	18	12.52
い	7	6.68	り	8	5.01
ろ	1	0.83	ぬ	12	6.68
は	1	1.67	る	3	5.84
に	3	3.34	を	12	12.52
			計	121	

その結果、棄却限界値は22.4、t値は18.19であるため、帰無仮説は棄却されず、一致していないとは言えない。同じように秋に着用した服の色で検定した結果、t値は25.25となり、帰無仮説は棄却される。しかし、棄却限界値に近い値が得られた。このことから、紫以外の色は昨年度、今年度で似ている色が選ばれているといえる。また、紫色は昨年度に比べて今年度の回答数が増えていたことから、秋冬の色の流行に大きな影響を与えていたと考えられる。

２）柄

昨年度の秋冬に着用した服の柄、今年度流行っていると思う服の柄について被験者が2人以上あげた回答を集計し、スピアマン順位相関係数検定を用いてアパレル店員と一般女性の回答に相関があるかを検定した結果が表である。

表4. 昨年度の秋に着用した服の柄

検定の結果	
相関係数	0.238141
Ｚ値	2.673122
Ｐ値(両側確率)	0.007515
Ｚ(0.975)	1.959964
データ数	127

表4は、昨年度の秋に着用した服の柄について検定したものである。判定においては「検定の結果」のZ値とP値を用いて判定する。ここでは、相関係数は0.238であるため、相関関係は正の相関関係があると判定される。Z値は2.673で危険率5%の両側検定の上側境界値Z(0.975)の1.96を比較すると、1.96＜2.673であるため棄却域に入る。したがって、危険率5%で「アパレル店員と一般女性の回答の間に相関はない」という帰無仮説は棄却され、「アパレル店員と一般女性の回答の間に相関がある」という対立仮説が採択される。また、P値についても、P値は0.0075であるから、危険率1%でも帰無仮説は棄却される。したがってそれら2変量間に有意な相関関係があると判定される。同様に他の組み合わせでも検定を行った。

また、相関のある組み合わせにおいて、回答の多い上位３つまでを抽出しアパレル店員と一般女性で一致しているところをみた。その結果、秋冬通して昨年度、今年度は「タータンチェック」「バーバリーチェック」が一致していた。よって、ここではこの2つの柄が流行っていたと考えられる。

３）形

袖、襟、丈、スカート、パンツの５つに分類し、それぞれ被験者が2人以上あげた回答を集計し、スピアマン順位相関係

数検定を用いてアパレル店員と一般女性の回答に相関があるかを検定した結果が表である。また、相関のある組み合わせにおいて、回答の多い上位３つまでを抽出しアパレル店員と一般女性で一致しているところをみた。

〈袖〉

表5. 昨年度の冬に着用した服の袖

検定の結果	
相関係数	0.157602
Ｚ値	1.824372
Ｐ値(両側確率)	0.068096
Ｚ(0.975)	1.959964
データ数	135

表5は、昨年度の冬に着用した服の袖について検定したものである。先ほどと同様に検定した結果、標本相関係数は正の相関があるが、Z値は棄却域に入らないため、帰無仮説は棄却されない。P値においても帰無仮説は棄却されない。したがって、2変量間に有意な相関関係があるとは言えないと判定される。同様に他の組み合わせでも検定を行った。

回答が一致していたのは、秋冬通して昨年度、今年度は「ビショップスリーブ」であり、この袖が流行っていたと考えられる。

〈スカート〉

表6. 昨年度の秋冬に着用したスカート

検定の結果	
相関係数	0.475271
Ｚ値	3.650625
Ｐ値(両側確率)	0.000262
Ｚ(0.975)	1.959964
データ数	60

表6は、昨年度の秋にアパレル店員が着用したスカートと、昨年度の冬に一般女性が着用したスカートについて検定したものである。

表6の標本相関係数では、正の相関関係がある。また、Z値は棄却域に入るため、帰無仮説は棄却される。P値においても帰無仮説は棄却される。したがって、2変量間に有意な相関関係があると判定される。同様に他の組み合わせでも検定を行った。

回答が一致していたのは、秋冬通して昨年度は「フレアスカート」、「ボタンダウンスカート」であったため、このスカートが流行っていたと考えられる。

４．まとめ

本研究では、前期追随者としてアパレル店員、後期追随者としてアパレル店員を除く一般女性を対象に現在のファッションの流行を調査し、一般女性の流行が前期追随者からの影響を受けているのかを目的に研究を進めてきた。しかし、アパレル店員と一般女性の間に大きな違いがみられなかったため、流行を取り入れる情報源は別にあると考えた。近年は、SNSの普及により、Instagramやファッション関係のアプリケーションを利用している人が増加した。そのため、これらの媒体から影響を受けている人が多いのではないかと考えた。

参考文献

[1] 芳賀はま子，流行についての成立要因とその諸相，埼玉女子短期大学大学研究紀要，第15号，pp.163-175,2004

[2] 柳井久江，４Stepsエクセル統計，オーエムエス出版，2018年

[3] DICカラーデザイン株式会社，PCCS（日本色彩研究所による日本色研配色体系）

[4] モダリーナ「イラストファッション・アパレル用語辞典」,http//www.modalina.jp